

Title	脱資本主義的生活とは(脱芸術/脱資本主義：半プロダクション礼賛)
Sub Title	
Author	石橋, 源士(Ishibashi, Genji)
Publisher	
Publication year	1999
Jtitle	Booklet Vol.4, (1999.) ,p.68- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000004-04211166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

脱資本主義的生活とは

石 橋 源 士

1. 脱資本主義という世界を探索するきっかけ

なぜ、私は脱資本主義という言葉に惹かれるのだろうか。脱資本主義的生活とは、どのような生活だろうか？「脱資本主義」という言葉に何となく期待をよせて、「脱資本主義」という言葉がしめす内容をいろいろと考えたくなってしまうのはなぜだろう。それは、「資本主義」および「資本主義的生活」に不満があるからに違いない。いったい資本主義の何に不満があるのだろうか？資本主義的生活とは、どのような生活であろうか？

資本主義社会か、そうでないかを大まかに定義するとすれば、経済行為がコントロールされるか、コントロールされないかと言えるだろうか？コントロールの大小は、国によって、さまざまである。コントロールをできるだけしないようにするアメリカのような国から、日本のような国もあり、最近のヨーロッパように、中道左派などといわれるような、コントロールのされ方もある。このコントロールの状態が気に入らないのだろうか。どうもそういうことではないらしい。私にとって、資本主義的生活の一番単純なイメージは、お金の為に自分の時間や、価値観を犠牲にして、我慢して働くというイメージである。そこでの価値は、お金が、一番。何よりも、お金をとりあえず稼ぐことが優先される社会がイメージされる。よくよく考えてみると、私が嫌いなのは、「お金が第一」の価値観にあって、その理屈のために、すべてのものが縛られていくというイメージが強いからではないかと思われる。

それでは、「お金が第一ではない」とされる共産主義や、社会主義の世界なら大歓迎なのかというと、それも違う。それは、共産主義、社会主義の世界が、仮にお金を第一の価値観に持っていなくても、「効率」とか「発展」という価値観が強く打ち出され、そのための奴隷と化しているようなイメージを受けるために、好きにはなれないのだと思う。さ

らに、意思決定のスタイルがトップダウンスタイルで、オルタナティブな方法を自分で、選択できないというイメージもある。「計画性」というものに、とことん縛られるイメージがある。このようなことから、好きになれないのだと思う。

そして、この両者に共通しているのは、その社会に生きる限り、否応なく、その社会で採用されているシステムの上に生活を築かなければならないというものである。この点が、私の一番不満な点である。ようするに、生きる上でのOS（基本システム）を自分で選べず、それに乗って生きるしかないという点が、私が両システムに対し不満足なイメージを持つ大きな理由となっている。

資本主義は、「市場経済」というOS、共産主義・社会主義は、「計画経済」というOS。

資本主義・市場というシステムにおいて、「機会が公平に与えられて、好きな時に好きなことをやって、意欲のある人はいくらでも稼ぐことができるのだから、こんなに良いシステムはない」、と思う人がいるのは当たり前だし、いても全然結構である。しかし私が問題としているのは、このシステムを望ましくないと思う人でも、今のところその社会に生きる限りそのシステムにお付き合いして生きていかなければならないという点である。良くも悪くも、社会を動かす上で、基本としているOSが、資本主義というOSであるならば、生きる上でのソフトを選択するにしても、どのソフトも資本主義というOSの上に成り立つ、ソフトなのである。それは、資本主義社会においては、経済的に採算の合う行為でなければならず、それ以外のメリットをたくさんもっていても、経済的採算の合うものでなければ、資本主義社会では、なかなか存立し得ないということを意味する。それ以外のOSを使って、生活を営みたいという人びとにとっては、はなはだ生きにくい世の中であるという点が私にとっては問題なのである。資本主義というOSが大好きでたまらないと言う人にとっては、何の問題も無いかもしれないが、たまらなく嫌な人にとっては、深刻な問題である。それでは、資本主義という大きなOSの上で、否応なく生きなければならず、それになじめない人たちはどうしたらいいのだろう？

そんな問題意識から、私の「脱資本主義」という世界の模索が始まった。

2. 三国統治下の西ベルリンでの生活

私は、壁が崩壊する前の西ベルリンに、1986年から、89年までの間、何度かにわたって滞在する機会を得た。壁崩壊のニュースは、ちょうどアムステルダムに一時出国していて、そこで聞いた。西ベルリンでの生

活は主に、当時スクワッターといって、空いている住居、建造物を不法に占領して住んでいる人たちと仲良くなったことから、スクワッターハウスに滞在することが多かった。

当時の西ベルリンは、陸の孤島と呼ばれ、東ドイツの真ん中にぽつんと、壁で360度囲まれて、資本主義の社会が存在していた。そして、西ベルリンは、当時ですら、アメリカ、イギリス、フランスの三国統治下に置かれており、正式には西ドイツのものではなく、西ドイツの航空会社であるルフトハンザは、西ベルリン、テーゲル空港には入れなかった。それなので、西ドイツ本国の兵役を拒否した若者や、ホモセクシュアル、レズビアン、さまざまな政治的主張を持つ人々や、西ドイツ社会および、通常の資本主義社会で、生きる場を得にくい人々が、流れてきていた。それでは、なぜ、西ベルリンならば、そのような人達が、生きやすかったのだろうか？私は傍観者の立場であったが、2つの理由を感じた。それは、西ベルリンが「暫定的三国統治下」にあったことと、「資本主義的にそれほど重要と思われていなかった」点にあるとわたしは思っている。

今述べたように、西ベルリンは東ドイツの真ん中にぽつんと位置していて、将来的に、いつ壁が撤去になるかという予想は、まったく立っていないかった。壁際には数十メートルごとに監視塔が立ちその中で、自動小銃を持った東ドイツ兵が、時折双眼鏡でこちらを覗いているような日常だった。壁の撤去どころか、いつ何時、東側諸国と戦争でも起これば、そのまままるごと人質となってしまう。こんな土地に、まともな人なら、一生住むべき家などを持って、自分のキャリアをそこで成就させたいと思うだろうか？その時点で、この土地は、仮の土地的性格を持っていた。それなのである意味では、「真剣」とか、「まじめ」「ちゃんとしなければ」というような脅迫観念からは、自由であった。なぜなら、こつこつと「まじめ」を積み重ねても、いつ何時それが壊れるか分からないからである。もちろん、西ベルリンに住んでいない人間だって、病気や、事故その他の予期せぬアクシデントとはつねに隣り合わせで生きていかなければならないのだが、西ベルリンの場合、つねに、東ドイツ領の真ん中で、東京23区よりも狭い土地で360度壁に囲まれて、暮らし続けると、あまり「ちゃんとしよう」という気もおきないようであった。それなので、大規模な資本主義的社会を発展させるための投資はあまりされてこなかった。もちろん、ベルリンフィルのホールもあれば、大きな国際会議場や、見本市会場など、つねに、他から人を呼ぶ工夫はしていたが、それでも、資本主義的な価値観が、何よりも優先するということにはなかった。したがって、第二次大戦中破壊された建物なども、意外にそのままにされていたり、使用せず放棄された、建造物がいたるところにあった。それもこれも、資本主義的興味の対象とされていないからである。要はお金が第一の世界ばかりではなかったのである。それなので、資本

主義的社会システムになじめない人も、十分に生きていくことが出来た。

もう一つは暫定的三国統治であるが、これは、すなわち西ベルリンは誰のものでもないということである。誰の土地でもなく、ただ共同管理者がいるだけである。法律や、規則はあっても、最低限その土地を秩序あるものとして、ガバナンスするだけのものであって、それ以上何かを誘導するようなものではない。それなので、よほど人を殺したりとか、破壊行為をしたりとかしない限り、価値観の違いや風俗的な問題は、解決すべき問題ではなく、そのまま、特別な面倒が起きない限り干渉しない問題であったのだと思う。そのような理由からも、通常社会（システム）の異端者達が、西ベルリンには集まってきていたのだろう。つまり、「ちゃんとしていない人」も、街の中で、社会の中で、どうどうとした居場所があったのである。異端者は、西側諸国からばかりではなく、東側からもきていた。

もう一つ、当時の西ベルリンに特徴的だったのが、さまざまなライフスタイルを選択することができ、共存することが出来た点である。つまり、資本主義的生活のトップランナーたる、銀行家や、大手商社のビジネスマンのような人も活動していれば、普通の居酒屋経営者や、街の商店主などもいて、NPOのような活動の掛け持ちをしながら生活している人もいれば、スクワッター（住居不法占領者）のように、貨幣経済にはほとんど、参加せず、互酬のような形で成り立つ生活が街の中で共存していた。

このような生活体験が、後に脱資本主義的生活とは、具体的にどのような生活かを考えていく上で、非常に参考になった。

3. 脱資本主義的生活とは

先にも述べたように、私にとって資本主義の嫌いな所は、「お金」を第一とした価値観と、その価値観というか原則が社会で共有されていることによって、日常のあらゆる行動がその原則のもとに縛られてくることである。そして、その原則を否応なく受け入れないと生きてゆけないという点が非常に気に入らない。だからといって、「市場」もしくは、「市場＋ある程度のコントロール」もしくは、「計画経済」のどれかを採用しなければならず、どれを採用しても、百人百様それなりに不満はあるものである。この三つのシステムでいうならば、私の好みは、「市場＋ある程度のコントロール」が好みであるが、隣のAさんは、このシステムがとんでもなく嫌で、コントロールなど何も無い、まったく規制が無い市場でバリバリ競争して勝ち残っていくような一生を送りたいと思っているかもしれないし、Bさんは、社会的理想を持ち、計画を立て、その理想の為に計画的に生産活動に参加していくような、一生を好むかもしれない。ならば、上の三つのシステム以外第四、第五のシステムを

考えたとしても、不満は常にあるのである。問題はただ一点。システム（「生活基本OS」）が一つではいけないということである。解決法はただ一つ、社会の中にAさん好み、Bさん好み、Cさん好みのシステム、つまり「生活基本OS」を併存させることである。

ベストな解決例ではないかもしれないが、先程挙げた、壁崩壊前の西ベルリンの生活は、この実現例の可能性を感じさせる例であったといえる。つまり、スーパーリッチと呼ばれるような人も、普通の勤め人も、百貨店も、高級レストランも、まちの居酒屋も、スクワッターが出入りするようなカフェも、みんなそれぞれのやり方で、存在し、違和感なく、同じ街の中に同居している。西ベルリンのアートや、アンダーグラウンドシーンと、ニューヨークやロンドン、東京のアートや、アンダーグラウンドシーンが大きく違う点は、ニューヨークや、ロンドン、東京のアンダーグラウンドの生活が、基本的に、自分たちの生活シーン以外の市場経済の原則に大きく左右されて成り立っているのに対し、西ベルリンの場合は、スーパーリッチや、勤め人が属しているような市場と、アンダーグラウンドで生活している人たちが属している市場は、まったく切れてはいないが、かなり、別な原理で動いており、ある意味で、別々のローカルマーケットを築いていたといえる点である。それなので、アンダーグラウンドシーンで、生活している人は、その生活を維持するために、何とか、自分が望むのとは違う原理の元で動いているOSの下で、無理に働くのとは違い、理想的ではないにしても、他の都市の状況とは違って、自分のペースで働き生きることができた。

その後、私は東京で、92年から94年まで、東京の西麻布にあるYELLOWというクラブの企画室に勤めることになった。クラブという場所は今では、大学生以下のティーンエイジャーが中心のストレス発散場のようになってしまった感があるが、当時はまだ、上は5～6歳のおじさんから下は、中学、高校生まで、業界も各種多様な人々が交差する、交差点のような役割をこれまた十分でなかったかもしれないが、果たしていた。十分ではないと感じる分、運営スタッフは、どうしたら文化として深みがあり、面白く、継続的にさまざまな方向に展開していける「場」と「きっかけ」と「つながり」を作っていけるかという問題を常に考えていた。この問題はお客をたくさん入れて儲けるという資本主義的な問題とはまた別な問題である。しかし、スタッフは常に、クラブ運営のマネジメントの問題とも直面していた。つまり、YELLOWの場合、ぱっつりと、大企業や、あまたの飲食店が所属し、しのぎを削っているのと同じ市場の上に乗っかり、その上で、採算をとっていかねばならなかった。通常の日本国民のほとんどが参加する資本主義というOSにのった上で、活動を組み立てていかねばならなかった。そのために、ずいぶんとコマーシャルな企画もやらねばならず、クラブとしての質を下げ、そこに出入りする人の質も下げざるを得ないジレン

マとも戦った。ここでの問題はやはり、YELLOWの運営が、通常の資本主義OSの上に成り立ち、そこの間で、経済的なやりくりをしなければならないことであった。しかし、YELLOWが、趣旨の近い活動主体と、提携し、その参加主体間でローカルマーケットをつくり、日々の活動をそのローカルマーケットの間で、支えあったらどうだろうか？

この考え方は、最近話題になっている、「エコマネー」のような考え方とも近いものであるといえる。つまり、空缶を拾ったり、お年寄りの介護の手伝いをした労働を金銭に変えて報酬を得るのではなく、「エコマネー」としてのポイントを貯め、そのポイントを別な形で、自治体が運営する宿泊施設を利用できたり、自分が介護が必要な時に使えたりというものである。介護に必要な、何百万円というお金を稼ぎ出す能力がなくとも、だれかの介護をする時間さえあれば、空いた時間にこつこつとポイントを貯め、自分の介護にも利用できるのである。このようなエコマネーは、その制度や、価値観を良しとする人々が支え合うことによって成り立つ。これは、資本主義OSとは異なる「生活基本OS」である。自分は、精いっぱい働いて、お金を貯め、そのお金でもって、将来必要なサービスを受けるという人は、もちろんそれで良い。しかし、そういう方法が出来ないか、もしくは好まない人は、自分たちで、別なOSを作らなければならない。

さて、都市生活において、物質的に恵まれた生活をしなくとも、質の高い時間を過ごしたいという人もいる。そういう人は、朝の9時から夕方6時まで空気の悪いオフィスにいて、夕方疲れきって帰ることを好まない。しかし、現状の資本主義OSの利用からだけで生活の糧を得ようとしている限りこの生活の実現は無理である。そこで、この人は、同じような価値基準を持つ人たちとサブシステムとしてのローカルマーケットを作らなければならない。つまりこういうことである。こういう生活を送りたいAさんという人がいたとする。この人の得意は水道工事と内装工事だとする。さて、同じような生活を送りたいBさんという人がいて、この人の得意は、料理をすることで、お店も持っているとする。そしてCさんは、自動車のメカに詳しくて…と、いろいろな人がローカルマーケットを構成するメンバーにいたとする。今までなら、Aさんは、朝、工事会社に出社し、何軒か現場をまわって、夕方仕事を終えるというパターンをとる。BさんもCさんもしかりである。それは、資本主義OSの上で、自分の仕事を展開させ、そこから金銭という形で生活の糧を得るからである。ところが、Aさん、Bさん、Cさんその他ローカルマーケットを構成するメンバーの間では、お金を取らず、エコマネーのような形で、ポイントを貯め、互いの間で、利用できるようにすれば、生きてゆく上で最低限必要なツールが「お金」ではなくなる分、今までのようにお金を得る為に、労力のほとんどを奪われずとも生きてゆくことができるのではないだろうか。

このようなローカルマーケットが、目的や趣向に応じて、いくらでも、何百、何千とできてくると、生活する上での基本OSを状況に応じて使い分けられるようになるのではないだろうか。一人で、いくつかのローカルマーケットに属することも可能である。

私にとって「脱資本主義的生活とはどのような生活か」という問いに対する一つの答えは、このように、いくつかのローカルマーケットを併存させ機能させるということである。

4. これからの課題

従来の資本主義に限界を感じ、その対策として、「エコマネー」のようなローカルマーケットを併存させる方法を一つの提案として考えることができるが、このような方法をしっかりと機能させるためには、ローカルマーケットをつくる参加者が、同じ価値観や目標を共有し、信頼し合うことが前提であり、マーケットを維持するために中心となる人物や、組織のマネジメントがしっかりとしていることが肝心である。このマネジメントの手法も、ローカルマーケットの目的や、趣旨に合わせて、千差万別さまざまなものがあって良いと思う。本研究会の伊藤さんも言うように、「マネジメントとは、何も企業に限らず、組織の運営ないし事業の継続的・計画的な遂行、つまり「望まれる結果を得る為に組織の資源を最大限に効果的に使うこと」をいう。」（『芸術創造の経営学』148頁）と述べているように、さまざまな好みに基づいた、さまざまなローカルマーケットのマネジメントスタイルのヴァリエーションについて、今後ますます、試行錯誤がなされていくべきであると考えている。

（いしばし げんし・慶應義塾大学大学院政策メディア研究科/AUD）